

## 若沖と一村 一時を超えてつながる

岡田美術館（箱根・小涌谷） 22. 12. 25～23. 06. 04



「岡田美術館」は、2023 年秋に開館 10 周年を迎えるため、これまでの展覧会でとりわけ人気の高かった画家 4 人を選び、2 人ずつ 2 部に分けて展示をしている。

第 1 部では、江戸時代の「伊藤若沖」と昭和時代の「田中一村」で、何れも近年人気急上昇した画家で、写生を徹底したことや、あでやかな彩色、画面に行き渡る緊張感など、作風においても似合う点が認められる。

田中一村 《豊饒の恵み 熱帯魚三種》 絹本着色 1973 年 上部右図  
南国の魚「アオブタイ」「シマタレクチベラ」「スジブダイ」を描き、下に植物を敷き「ヤコウボク」の白い花をあしらい彩に変化をつけた作品である。

伊藤若沖 《孔雀鳳凰図》 双幅 絹本着色 18 世紀中頃



画伯が隠居して画業に専念した 40 歳頃の作品で、鳥、鳳凰は想像上の動物でいずれも大変華やかな大きな鳥で大名家に納めるめでたい大きな鳥で、初々しさが感じられ、細部にまでほどこされた緻密な描写が素晴らしい。

この作品、長い間行方不明であったが、「若沖」の生誕にあたる 2016 年に、83 年振りに発見されて大発見として話題となった。

田中一村 《白花と赤ショウビン》部分 着色 1967 年



白と緑青の流れるような美しさを描いた作品は、リズム感あふれる装飾性が豊かで、白い「ダチュラ」と緑の葉のコントラスト、アクセントのように描かれた「赤ショウビン」は、正確にスケッチして描かれた透明感に満ちた世界で、全体に流れる清々しさは鮮烈である。

「赤ショウビン」は、ブッポウソウ目カワセミ科の野鳥で、火の玉が燃えているような朱色の美しい鳥である。

大きな葉の背後にあるダークな色相の中には、丹念に「ガジュマル」の気根が描かれていて、白花を浮き立たせていることが特徴の作品である。